

## 甲午震災記念碑の解説文

東洋大学非常勤講師\* 北原 糸子

Itoko Kitahara

4-4-1-5-201, Nara, Aoba-ku, Yokohama-shi

227-0038 Japan

巡検コースの酒田市光丘文庫を訪問した際に、日枝神社境内の庄内地震(1894)の震災記念碑を見学しました。碑文は酒田市史史料篇に翻刻されていますので、それを紹介します。ただし、ワープロ辞書にない漢字は意味を同じくする字を( )で換えました。おおよその意味を末尾に添付しておきます。

### 甲午震災記念碑

(下日枝神社境内、タテ 307 cm、ヨコ 158 cm)

従三位勲二等 西村茂樹 篆額

庄内之地、文化以来、三罹震災、而明治二十七年十月二十二日之变、実莫惨焉、蓋此月之初、天氣晴朗、温暖如春、井涸水渴、至前日、陰鬱濛濛、寒冷俄加、此日薄暮、轟然激震、万雷斎発、地裂濤激、一瞬之間、比屋転覆、既而火四起、炎焰焦天、僅穴屋梁而脱者、更投烈火之中、或没噴泥之隙、前蹟後(跌)、出九死而得一生者、苦喚悲号、声動両間、而父子兄弟夫妻不遑相救焉、凡灰燼二千三百六十戸、倒廢百九十九戸、破壊六百五十戸、死者百六十七人、傷者三百四十一人、夫酒田之為地、北海要港、人足物殷、雄乎両羽、而今、満目所触、凄風冷雨、敗瓦累々、狼藉焦土、死而不得礼葬、生而泣於餓窮、吁嗟天変之劇、人事之惨、洵至極矣、官衙公署、即定便宜謀救恤、応急処弁、旧藩主酒井伯、特来慰問、爰給于倉庫、巨室本間氏、世名慈善、率先爰給于別牆、其他諸氏賑給共三十八万百十六戸、而本間氏実過其半矣、其傷者搬諸避病院、名医来診、施藥治療、又失住者、設(藁)舎以防寒、苟便民之事、莫不畢謀、於是菜色少蘇、時強鄰構事、天皇親裁軍国機務、進大(旗)乎広島、而 皇后親製包帯、頒賜創痍將士、及奏此惨状、両陛下震悼、直賜金四千元、尋差遣東園侍從傳宣 聖諭、黎民感泣洪恩罔極、僉曰、復覩天日矣、猶春風之長養草木、靡不欣々向荣也、於是海内勇於義者、勃然而起、捐貲給衣具者有焉、飛檄而募捐者有焉、遠来慰籍者有焉、人民安堵、

努力就産業、市(邸)漸將復旧、今茲罹災之七年、胥議建碑日枝祠畔、將傳賑恤之德于悠久、請文于予、凡人之入逆境也、反省之念誰不切実、而稍復順境也、忸乎故常、趨乎安佚、遂忘昔日之大厄、是以重有凶矣、惟惕然敬懼、預備有余、則庶幾無患歟、此舉足以敬戒後世不忘也、於是乎記。

明治三十三年歲在庚子十月

菊池秀言 撰文

巖谷修 書

(裏面)

建設惣代人

白峰善吉

橋本熊五郎

木村茂三

(酒田市史 史料篇 7 集、1977 年、320-321 頁)

碑文の概要: 庄内は文化年間以来 3 回も地震に見舞われた。明治 27 年 10 月 22 日の変災は、実にこの上ない惨状であった。10 月のはじめは天気も良く春のように暖かであったが、井戸の水が涸れ、地震の前日には空気は陰鬱、俄に寒くなった。夕刻、轟然たる激震となり、万雷が一度に落ちたようであった。地は裂け、一瞬にして家が崩れ、火が発生し、たちまち天を焦がすほどになった。倒れた家から逃れた者も再び火に見舞われたり、吹き出した泥に足を捕られ、蹟き、九死に一生を得た者も苦しみ嘆き、その声があたりに満ちた。家族は互いに救うことも出来なかった。焼失家屋二三六〇戸、全潰家屋一九九戸、半壊家屋六五〇戸、死者一六七人、負傷者三四一人である。そもそも酒田は日本海の要港であって、人が行き交い、物が豊富な地として奥羽中に著名である。ところが、今眼にするとところは、焦土と化し、つめたい風雨のなかに地震で倒れた残骸が累々とあるだけである。死しても手厚く葬られず、生きて餓えに泣く、この激変はなんたることか。国や県が即座に救恤の挙に出、

\* 〒227-0038 横浜市青葉区奈良 4 丁目 4-1-5-201

また旧藩主が慰問され、食料を供給された。また、本間家などは三八万余食に及ぶ大半の炊き出し米を救恤した。負傷者は病院に送られ、医者や薬の手当を受け、家を失った者には避難所が用意された。ここにおいて民の顔色も多少昔に戻りつつある。

しかしながら、隣国との戦争となり(日清戦争)、天皇は軍を指揮するため広島の本営に赴き、皇后は自ら傷痍軍人のため包帯を作られることとなったが、地震の惨状を奏上したところ、恩賜金四千元を下され、侍従を派遣された。民はこのことに感涙し、春が巡ってきたような思いになった。また、国内各地の多くの人々からも義援金が寄せられ、被災民も心安く仕事に励むよう努力し、漸く街も旧に復しつつある。罹災以来七年が経った現在、日枝神社内に碑を建て、賑恤の徳を世に長く伝えることとして、私(菊池秀言)に一文を成すよう請われた。人は逆境にある時は誰でも反省の念を持つが、順境に至ると安逸に走り、遂に昔の災難を忘れてしまう。これではまた再び災難を重ねることになる。備えあれば、憂いなし、後世長く忘れないためにここに記す。

\*「甲午震災記念碑」の篆字は西村茂樹(1828-1902)による。西村は元佐倉藩士、明治期は文部官僚、華族女学校長などを勤めた人物。この時期は各地に講演旅行して日本弘道会の道德運動を進めていた。

\* 菊池秀言(1855-1944)酒田浄福寺の住職、中国で布教活動をするなど明治仏教界で活躍。日本弘道会酒田支部長などを務めた。

\* 巖谷修(1834-1905)は書家。水口藩士、明治維新後太政官で詔勅などの浄書をし、貴族院議員を務めた。童話作家巖谷小波の父。

\* 碑の建設総代人：白崎善吉(1848-1911)は、代々酒田伝馬町の呉服商で、善吉は町会議員、郡会議員、後に県会議員を務めた。特に災害防止に努力した人物。橋本熊五郎(1849-没年不明)、酒田町上小路の酒造家、酒田町町会議員を務めた。木村茂三については詳細不明。

(碑文に関わる人物については光丘文庫土岐田正勝氏にご教示いただいた。)

